



パラグアイって、どんな国？

在パラグアイ日本国大使館経済・経済協力班 ^{まきむら} 牧村 ^{だいさく} 大作



1. はじめに

パラグアイ・アスンシオンに、有償資金協力（円借款協力）、草の根・人間の安全保障無償資金協力（以下、草の根無償協力）、情報通信の担当として2011年5月に赴任しました。早いもので、既に1年が経過しました。

パラグアイと聞いて、パラグアイの位置をどれだけの日本人が正確に言えるかと考えると、ほとんどいないのではないのでしょうか。ただ、最近では、ワールドカップのサッカーで日本代表とパラグアイ代表が戦ったこともあり、少しはパラグアイになじみができてきたかもしれません。今回のコラムをきっかけとして、少しでもパラグアイのことを身近に感じていただき、興味を持っていただければと思います。

2. パラグアイの日系人

まず、パラグアイの日系人についてお話しさせていただきます。南米の日系人と言えば、ブラジルやペルーというイメージしかないかもしれませんが、パラグアイには日系人が約7,000人（うち、在留邦人数は約3,900人）もいます。日系移住地では多くの日系農業従事者が大豆や小麦を栽培しており、パラグアイの農業の発展に大きく貢献していることから、パラグアイ政府からの評価が高く、パラグアイ人からも尊敬を集めています。そうしたこれまでの日系人のパラグアイ社会への貢献から、パラグアイはかなりの親日国となっており、外交官として、大変仕事がしやすい土壌があると言え、その状況にいつも感謝をしています。

日系移住地では日本語教育にも熱心に取り組んでおり、後進の育成にも力を入れています。草の根無償協力サイトのフォローアップ調査のために、2012年4月末にパラグアイの南部のピラボ移住地とラ・パス移住地を訪れ、同年5月上旬にはパラグアイの東部のイグアス移住地を訪れましたが、日系のスーパーでは店員さんとは普通に日本語で会話することができました。アスンシオンでも日系農家が栽培したお米や野菜を買うことができ、和食レストランでは、天ぷら、寿司、酢の物や味噌汁も食べることができるので、食生活で日本食が恋しくなることはありません。

3. パラグアイの貧富の格差

現在、自家用車で通勤していますが、道路を走行していて、まず気がつくことはストリートチルドレンの多さと言っていていいかもしれません。信号待ちの車の窓ふきをして、チップを求める様子は日常になっています。子供のみならず、幹線道路では、様々な人が信号待ちの運転手に向けて商売をしています。新聞を毎日売りさばっている人、フルーツや野菜を売る人、お菓子やガムを売る人、ストリートパフォーマンスをしてチップを求める若者……。一方で、大型ショッピングセンターでは多様な商品が陳列棚に並んでおり、衣類から家電まで何でも購入することができます。ただ、こうしたショッピングセンターで日常の買い物をできるパラグアイ人は限られた一部の層だと思えます。貧富の格差が大きいのは南米諸国の特徴の一つですが、パラグアイもその例外ではありません。

日本は1976年以降、一部の年を除いて、対パラグアイ政府開発援助（ODA）のトップドナーであり、これまでの援助の累計実績は、有償資金協力1,382億円、無償資金協力317億円、技術協力811億円となっています。主要ドナーとしては、世界銀行、米州開発銀行、スペイン、米国、ドイツ、韓国等が挙げられます。また、様々な分野で多くの青年海外協力隊が活躍しており、このこともパラグアイにおける日本の存在感を高める要因になっています。日本の援助の重点分野は、保健医療改善、小農自立化支援、水・衛生改善の三つの分野となっています。

4. パラグアイの情報通信事情

2010年6月に、パラグアイは、同国の地上デジタルテレビ放送方式の規格として日本方式（ISDB-T方式）の採用を決定しました。当時、海外での日本方式の採用は、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、チリ、ベネズエラ、エクアドル、コスタリカに続いて8番目です。2011年5月には、公共放送局が設立され、同放送局により地上デジタルテレビ放送の試験放送が実施されました。また、同年8月には、同放送局により地上デジタルテレビ放送の本放送が開始されました。民間放送事業者への地上デジタルテレビ放送用のチャンネルはまだ



写真1. 公共放送局設立記念式典の様相 (2011年5月撮影)

日本の協力の下、2011年5月に公共放送局が設立されました。日本本国からは山川総務審議官が記念式典出席のため出張され、パラグアイ着任1週間目にして、大変忙しく各種アレンジをしたことを思い出します。

割り当てられていませんが、今後の進展に期待しているところです。

日本と同様、携帯電話はパラグアイ人にとっても欠かせないものとなっているようです。固定電話の普及率が8%である一方、携帯電話の普及率は90%を超えています。一人で携帯電話を2、3台持っている人も珍しくありません。パラグアイでは電車がないため、日本のように通勤・通学の電車内で、携帯電話を操作する風景を見ることはできませんが、携帯電話の画面を見ながら、ショッピングセンターを歩く人々はたくさんいます。また、会議中でも、映画館で映画を見ているときでも、携帯電話の呼び出し音を聞く機会が頻繁にあります。携帯電話と同時にマナーも携帯してほしいと感じる毎日です。

ブロードバンドインターネットは、ADSLや無線インターネットが一般的です。ADSLは通信速度に応じて、料金が設定されています。WI-FIネット接続が無料でできる大型ショッピングセンターやレストランが増えているため、職場や自宅以外でもネット接続を楽しむことができます。パラグアイのレストランで食事をしながら、日本の友人とスカイプで話することもできます。

パラグアイにおいても情報通信が徐々に進展していますが、そうしたICTがパラグアイの経済活動の底上げに役立つことを期待しており、自分も微力ながら、情報通信の担当として、パラグアイの発展のお手伝いをできればと考えております。



写真2. ランパレの丘から見たアスンシオンの風景 (2011年5月撮影)

アスンシオンから車で約30分のランパレの丘から見た風景です。パラグアイの気候は亜熱帯気候で、緑が多いという印象です。

5. パラグアイの豊かな水資源と観光資源

日本からパラグアイへお越しの際は是非、イタイブダムとイグアスの滝を訪れてください。

パラグアイとブラジル国境に位置するイタイブダムは、中国の三峡ダムに次いで、世界第二位の出力を誇ることで知られています。本年5月上旬に近くに出張した際、イタイブダムを視察しましたが、そのスケールに圧倒されました。

また、イグアスの滝は、北米のナイアガラの滝、アフリカのビクトリアの滝と並んで世界三大瀑布の一つとして知られています。残念ながら、まだ、ブラジルとアルゼンチンの国境上に位置するイグアスの滝を訪れたことはありませんが、パラグアイ東部に位置するエステ市が主要なアクセス拠点と



写真3. エンカルナシオン市から見たアルゼンチンの風景 (2012年4月撮影)

パラグアイの南部に位置するエンカルナシオン市からパラナ川を挟んだ対岸にアルゼンチン・ボサダスを見ることができます。最近、エンカルナシオン市は、パラナ川の沿岸に遊歩道を整備し、人口のビーチも作ったそうです。



写真4. イタイブダムの外観（2012年5月撮影）

イタイブダムは、パラグアイとブラジルが共同で管理をしており、両国の国境を流れるパラナ川に作られたダムです。車で2時間かけて視察しました。

なっているので、いつか行ってみたいと考えています。

パラグアイ土産としては、「ニャンドゥティ」と「マテ茶」をお勧めします。

「ニャンドゥティ」は、パラグアイの公用語の一つであるグアラニー語で「蜘蛛の巣」を意味するレース刺しゅうです。スペイン人が持ち込んだヨーロッパのレース刺しゅうがパラグアイで独自に発展したもので、刺しゅうの模様は同国の多種多様な自然をモチーフにしています。

また、ビタミンやミネラルを豊富に含み、胃腸の消化作用を助ける国民的飲料「マテ茶」もスーパーで手軽に購入できますし、パラグアイの代表的特産品とも言え、お土産として



写真5. イタイブダムの内部（2012年5月撮影）

タービンが回転している様子を間近に見ました。発電された電力はパラグアイとブラジルとで均等に分けられ、パラグアイは余剰電力をブラジルに売電しています。

最適であるかもしれません。

6. おわりに

パラグアイ・アスンシオンに来てしばらくは、大変な暑さとスペイン語にあふれた世界に戸惑いましたが、今となっては、この牧歌的な農牧国をすっかり気に入り、生活にも慣れ、週末はゴルフを楽しんでいます。パラグアイでの任期は残り2年となりましたが、今後とも日本・パラグアイの懸け橋となるよう頑張りたいです。